

「海の妖怪」としての牛鬼

A study of USHIONI :Its characteristics as a “Marine Yokai”

加藤 嵩人*

Takahito KATO*

*：國學院大學大学院文学研究科博士後期課程文学専攻

*：Kokugakuin University Graduate School of Letters (Literature) doctoral student

キーワード 妖怪・牛鬼・口承文芸・妖怪図鑑・水木しげる・メディア
 Keywords Yokai, USHIONI, oral literature, Yokai illustrated guidebook, Sigeru Mizuki, media

Abstract

This paper examines the background of how the *Ushioni*, which originally held diverse folkloric identities nationwide—such as inhabitants of deep pools and waterfalls—came to be interpreted as a "marine yokai" in the modern era. By focusing on escape legends set along the coasts of the Iwami region in Shimane Prefecture, this study discusses the process through which this localized variation was popularized through Showa-era media, such as the works of Shigeru Mizuki, and ultimately established as the representative modern image of the *Ushioni*.

まえがき

牛鬼（うしおに／ぎゅうき）と呼ばれる妖怪が存在する。鬼や天狗、河童などのように、日本中の誰もが知るという程の知名度はないが、それでも「妖怪好き」を自称するような人間であれば必ず知ってはいる程度の存在感を放つ妖怪である。妖怪図鑑のような書籍媒体で目にしたことがある、あるいはアニメ『ゲゲゲの鬼太郎』での描写を象徴的に覚えているといった人も多いのではないだろうか。牛鬼の歴史を遡ると、古くは清少納言『枕草子』¹⁾中において、「名おそろしきもの」を列挙するうちのひとつとしてその名に対する言及が行われている²⁾ほか、『太平記』³⁾においては、かの源頼光や渡辺綱に襲い掛かる怪物としても登場している。また、近世以降の怪談文芸においてもしばしば作中に姿を現すほか、狩野派絵師による「化物尽くし」系統の絵巻にも、その名に連れ立って恐ろし気な怪物の姿が描かれていることが多い。

一方、そうした文芸史の一場面に限らず、牛鬼は日本各地の伝説や昔話といった口承文芸上においても、しばしば怪物として語られる存在である。その多くは上記『太平記』のものと同様、人を害し、時として武人に退治されるような、いわゆる怪物としての役割が与えられているが、時には淵や滝などに住まうヌシ的存在として、単に退治される怪物以上に畏怖の表象を与えられている場合も見られる。また、それらに加え、その姿形や性質についても伝承地によって異なるなど、伝承上の牛鬼像は多岐に渡るものであることが確認できるだろう。

とりわけ近代においては、戦後昭和期に作家水木しげるが自身の雑誌連載や刊行物において幾度もその存在を取り上げ、現代にまで続く「牛鬼表象」と呼ぶべきものを形作っている⁴⁾。また、いわゆる妖怪図鑑などの娯乐的に妖怪を解説する書籍群において、牛鬼は出現するとされる場所に関して、「牛鬼は淵や海などの水辺に現れる妖怪である」というような説明が付されている

る場合が多い。

なお、伝承上の牛鬼や愛媛県宇和島地域の祭礼における作りものである牛鬼についての先行研究としては大本敬久「牛鬼論—妖怪から祭礼の練物へ—」⁵⁾などが挙げられるほか、近代以降の大衆文化上での展開については拙稿「妖怪「牛鬼」の現代的表象の成立とその変遷」⁶⁾が挙げられる。

本稿ではそうした「海に出る妖怪」としての牛鬼に着目し、どのような伝承がなされ、またそれらが近代においてどのように受容されてきたかを論じる。

海の伝承としての牛鬼譚

水辺に現れる牛鬼の伝承としては、特に牛鬼淵や牛鬼滝など、牛鬼の地名を冠する土地に住む怪物、あるいはヌシとして伝承されるものが挙げられる。柳田國男が『山島民譚集(一)』「河童駒引」⁷⁾にて示している通りに、海や川、淵、沼などに牛、それも尋常のそれではない怪物のような靈性を持ったものが住み着き、時に人を害したという伝承は全国的に存在している。こうした牛と水の関係について、同じく柳田の「河童駒引」や、それを受けた石田英一郎『河童駒引考』では、牛が度々雨乞いの供犠に関連付けられたことや、夏越の祭や牛の藪入りといった行事における牛と水との関わりに通ずるものがあったためとしている。ともかく、牛とは水に縁深く、また農耕に密接する家畜として、人の生活に最も密接な関係を築いていた動物の一種であると考えられる。

また、全国のヌシ伝承に着目した論考として、伊藤龍平『ヌシ 神か妖怪か』が存在する。伊藤は全国に伝承されるヌシという存在について、自身の持つ領域に君臨し、自然社会の象徴として人間社会としばしば交渉を行う、尋常でない靈力を持った存在であると定義し、その中でも蛇や蜘蛛などと並んで牛が水辺のヌシとして扱われる伝承が散見されることを指摘する。

一方、同じ水辺に出現する牛鬼であっても、前述の通りに水辺のヌシとして語られるものとは異なった性質を、海辺に出現する牛鬼は持っている。以下に示す事例は、山崎里雨「影わに・犬神・牛

鬼・河童」⁸⁾にて提示された、海に出現する牛鬼の伝承である。

事例1：島根県大田市大浜村字波路浦「影わに・犬神・牛鬼・河童—石見邇摩郡温泉津—」

温泉津湾内に大浜村字波路浦という漁師部落がある。

其所の大下という家の幾代か前の主人が、組下の漁師三人と共に、旧四月の或夜のこつ、鯖釣に出た。他の舟はかなり沖の方へ出漁するのに、大下等は湾を一里許り外海に出た所で、大浜と福光の村界シューキと云って、岸からは一町と距っていない所で釣を始めた。此所は是迄にも二三度北場所で、他の漁師共には秘している好漁場である。今日も相当な豊漁で、四人の者は手を休める暇もない位であった。夜もいたく更けた頃、岸の方から「行うか、行うか」と声をかける者がある。四人は等しく或る不安を予感した。それは、此の辺は高瀬山の末端が約三十米突の断崖をなして海に臨む所で、人の行き得る場所ではないからである。然し時たま狐が斯うした悪戯をする事があると信じている彼等は、狐が魚ほしさにする悪戯だろうと思いなおしたから、「オー、来たけりゃ来いやー。」と揶揄半分に答えた。

返事に応じて何かが海中に躍り込んだ。水音のあまり大きかったのに四人は不吉を直感して、釣りの手を止めた。瞬後、夜光虫の光る波を蹴って舟に泳ぎつかんとしているものが牛鬼である事を、漁火の淡明りで透し見た一同は愕然色を失った。斯くして、四艇櫓の小舟と、牛鬼の競泳は波路浦の浜に帰る迄の一小一里も続けられた。

汀に最も近い大下の家に飛込むが早いか、大戸をたてた(たてるは締めるの方言)まま土間にへたばり込んだ。(へたばるは坐り込むの方言)力漕に死力をつくした四人は、精も根もつき果てて、是以下争う気力は無くなっている。外では中に押入らんとして暴れ狂う牛鬼の怒号が聞かれた。妻女は何とかして四人の男の気力を回復させなければ、一家皆喰い殺さるる事を恐れたが、土間に坐り込んだまま動く気配もない。止むなく火箸を真赤に焼いて土間に下り立った。そして大戸の鍵穴に口を寄せて、「今戸をあけてやるから静かにせ

い。」と、おらんだ。牛鬼が声のもれ来た鍵穴から中を覗き込んだ瞬間、妻女は満身の力をこめて焼火箸をその目に突き込んだ。

痛手をうけた牛鬼は、大戸を今にも蹴破るかと思う程に猛り狂っていたが、不図入口の柱の上端に貼ってあった出雲大社の護符が目につくや、身震いすると共に凄惨な咆哮を残して逃げ去った。当地方の漁師が、競って出雲大社の護符を入口に貼るようになったのは、此の事があってから後だと云われている。

この事例では、牛鬼は漁師との問答を切っ掛けとして崖から海に飛び込み、そのまま泳いで漁師たちの船を追った後、陸地の民家にまで追跡を続行する存在として語られる。山崎は上記事例のほか、同論文内で同地に伝わるものとして、異なる二種の牛鬼にまつわる伝承を示しているが、そのうちの一つの事例もまた同様の話型を持つものとなっている。また、山崎と同年、岡田建文が「石見牛鬼譚」⁹⁾にて、同地の老人から聞いた話として示す牛鬼の伝承も、先に示したものと同様、逃竄譚としての性質を持っている。

事例2：島根県那賀郡浅利村（「石見牛鬼譚」）

那賀郡の海岸地の浅利村での伝説。これは政五郎の遭難談よりも古い話だが時代は判らぬ。村の神職某が或る夜一人で浜辺へ夜釣りに行き、非常に多く釣れるので嬉んでいる最中、濡女が赤子を抱いて出て来た。其時は最初から抱いて下さいと言わずに、この児に喰べさすから、魚を一疋下さいと乞うた。神職が一疋遣ると、赤児がムシャムシャと頭から骨ぐるみ尾まで残さず喰った。濡女は更にもう一疋もう一疋と。遂に籠の中の魚を皆喰べてしまって、今度はお腰のものと言い出した。

濡女に要求されると、唯人も拒むことが出来ない不思議がある。神職は差していた脇差を抜いてやったら、赤児はそれをバリバリと噛んで喰べた。それから後に、濡れ女が一寸此児を抱いていて下さいをやって手渡した。そして海の中へ這入り込んだ。

神職は其隙に釣道具を投棄して駆出したが、抱

かされた赤児は石になって手から離れない。やがて牛鬼が恐ろしげな態で追うて来た。神職は懸命に逃走るけれども、ややもすると歩速が鈍って来る。既に迫られて危急な場合となった時、前方の上空から何やら光った物が、箭の如くに飛んで来て牛鬼の頭のあたりへグサと突き刺した。其為に牛鬼は追わなくなり、漸くのことで我家へ逃げて来ると其処には案じ顔な妻女が立って待っていた。

妻女は初め、良人が釣りに出た後でお針をしていると、良人の居室の刀架にある二本の愛刀の中で、どれだか一本がシャンシャンシャンと響きを立てて頻りに鳴るのがある。甚だ奇怪な事である、或は良人の身の上に何か異変ある前兆ならんと、心配して戸外へ出て見る気になり、立ち上って表戸を開ける時、一本の脇差が独りで鞘を脱けて来て、戸の開いた処を飛鳥の勢いで通り、海辺の空へ向けて闇の中へ飛んで行った。不思議な事もあるものと、妻女は益々心配をして其儘戸外に立っていたところであった。

さて翌朝、神職は村の者を催して、昨夜の場所へ来て見ると、磯辺に血の流れた痕はあったが、牛鬼も彼の脇差も共に行衛が知られなかった。多分牛鬼は、頭部に刀を立てながら海中に没し去ったものであろうと評定された。

岡田の示したものは、先の事例①とは話の筋を共通としている一方、濡れ女という別の妖怪との連携を行なっているという点で特徴的である。即ち、この2例を含む、島根県に逃竄型の牛鬼譚の共通事項として、(1) 漁師が夜の海で釣りをしていると (a) 牛鬼に出会う (b) 女性（濡れ女とされることも多い）に赤子を抱くことなどを要求され、それに従う (2) 牛鬼に追いかける (3) 最終的に神仏や刀など、霊的な力を持つ守護者（マジックアイテム）によって牛鬼は退散させられる、という3段階のモチーフにて構成されていることがわかる。

このほか、海に出没する牛鬼の伝承としては、島根県にて報告された海より現れた牛鬼が人間に相撲を挑み、力士や力自慢の手によって退治される話（3事例）や、牛鬼が別の何かに化けている、

或いは別の何か化けたものが牛鬼であるとする話（2事例）、海上に現れる怪火として人の通行を阻害する話（2事例）なども見られた。

こうした、牛鬼が海に出没するという話は全国的に計17事例が確認でき、京都府に2事例、長崎県に1事例、大分県に1事例がそれぞれ見られる一方で、それ以外の13事例は中国地方、特に先に紹介した事例と同様の島根県に集中しており、地理的な偏りが見られ、全国的に見ても中国地方の一地域に限定的なものであり、牛鬼伝承が西日本を中心に60事例以上あることを考えれば、あくまでも多様な伝承内容の一バリエーションであると位置付けられる。

「海の妖怪」化していく牛鬼

一方、近代以降の妖怪図鑑において牛鬼の項目が立てられる際、前述の逃竄型の話がキャプションとして用いられる場合が多く¹⁰⁾、これが近代の書籍資料から確認できる牛鬼の最も代表的な伝承パターンと化している。即ち、現代において牛鬼は「海の妖怪」として一般的に解釈される場合が多いと言える。

このような「海の妖怪」としての牛鬼像の確立に際して、大衆向けに強く影響力を持って発信した人物が、先にも触れた作家水木しげるである。水木が牛鬼について初めて触れるのは1966年、『週刊少年サンデー』誌上に持っていた連載、「ふしぎなふしぎなふしぎな話」の第15回、そのまま「牛鬼」¹¹⁾と題された回でのことである。本連載において、水木が一枚絵とは別に読み物として載せている話というのが、先に事例1として示した大浜村字波路浦における牛鬼譚であった。また、挿絵として狩野派絵師の「化物尽くし」絵巻にて通例牛鬼の名を添えて描かれる怪物の絵を元としたイラストが水木によって描かれている¹²⁾が、ここでもその背景画として海の描写が追加されており、本文の内容と併せて「海の妖怪」としての性質を後押しされている。水木は2年後の1968年に漫画作品『ゲゲゲの鬼太郎』¹³⁾の中でも牛鬼をキャラクターとして登場させるが、ここでもやはり海辺に出現する妖怪として描写されて

いるほか、同年の「日本妖怪大全」や1974年の『妖怪なんでも入門』や『妖怪クイズ百科じてん』においても、「ふしぎなふしぎなぐしぎな話」と同様の形式で牛鬼を紹介している。また、同時代の作家の著作¹⁴⁾においても、水木の著作を孫引きする形で牛鬼の説明が行われており、牛鬼の「海の妖怪」像が確立している様が確認できる。

このように、元来は地方伝承の一パターンであった「海の妖怪」としての牛鬼像が、本来的な尺度を超えて、牛鬼の代表的な伝承像へと押し上げられたのには、水木しげるをはじめとする、昭和期の妖怪文化の後押しが存在したのである。

結語

本稿で検討した通り、島根県を中心とする海辺の牛鬼伝承は、濡女との連携やマジックアイテムによる撃退といった独自の物語モチーフを有している。これが水木しげるの著作や『ゲゲゲの鬼太郎』などの大衆媒体において象徴的に取り上げられたことで、地域的であったバリエーションが標準的な牛鬼として全国的に再定義されるに至った。この過程は、口承文芸が活字や映像といったメディアによって複製、拡散され、大衆に受容される際、特定のイメージが固定化/増幅されていく妖怪表象の動態を如実に示すものであると考えられる。

今後の展望としては、今回は海辺の伝承に焦点を当てたが、内陸部の淵や滝に住まうとヌシ的存在としての牛鬼伝承、あるいはそうした水神的性質を持たない牛鬼伝承なども踏まえ、牛鬼、延いては牛の怪異自体の検討を行い、また、実際の妖怪伝承と近代的妖怪観によって再解釈され得る妖怪像との齟齬についても精査していきたい。

脚注

- 1) 松尾聰, 永井和子校注・訳: 『新編日本古典文学全集』18巻, 小学館, 1997年
- 2) ただし、飽くまで名前だけの記載であり、具体的にこの牛鬼がどういった存在であるかについては不明のままである。また、この段では、内容のその殆どが飽くまで恐ろし

気な名前を持つものとして列挙されるに留まっており、それらの実態がそのままに恐ろしいと考えられていたとは必ずしも限らないことにも留意は必要である。

- 3) 長谷川端校注・訳：『新編日本古典文学全集』57巻, 小学館, 1998年
- 4) 近年では、国民的漫画作品である『ONEPIECE』作中にて、こうした牛鬼像をモチーフとしたキャラクターが登場するなど、水木の牛鬼に関する業績は現在でも多くのサブカルチャーに影響を与えている。
- 5) 『研究紀要』4巻, 愛媛県歴史文化博物館, 1999年
- 6) 加藤嵩人：「妖怪「牛鬼」の現代的表象の成立とその変遷」、『東アジア文化研究』第12号, 2025年
- 7) 甲寅叢書刊行所, 1914年（本稿では『定本柳田國男集』第二十七巻（新装版）, 筑摩書房, 1970年を参照）
- 8) 山崎里雨：「影わに・犬神・牛鬼・河童」, 『郷土研究』7巻4号, 郷土研究社, 1933年（本稿では小松和彦編：『怪異の民俗学② 妖怪』, 河出書房新社, 2000年を参照）
- 9) 岡田建文：「石見牛鬼譚」, 『郷土研究』7巻5号, 郷土研究社, 1933年（本稿では小松和彦編：『怪異の民俗学② 妖怪』, 河出書房新社, 2000年を参照）
- 10) 注6と同。
- 11) 水木しげる：「ふしぎなふしぎなふしぎな話 15 牛鬼」, 『週刊少年サンデー』8巻42号, 小学館, 1966年
- 12) この挿絵について、連載の中では佐脇嵩之が描いたものであるとの記述がなされているが、筆致の一致などから、中村雄二郎：「無気味なものの形象化<<化物づくし>>」（『美術手帖』8月号, 美術出版社, 1964年）内で紹介された「鳥羽僧正真筆」本を元としていることが御田歙：『水木絵のモトエ総集編（うしみつのかね, 2016年）にて指摘されている。
- 13) 水木しげる：『ゲゲゲの鬼太郎』「牛鬼 前編」, 『週刊少年マガジン』10巻58号, 講談社, 1968年
- 14) 佐藤有文：『日本妖怪図鑑』, 立風書房, 1972年や佐藤有文：『学習まんが・ふしぎシリーズ³⁵ 日本の妖怪なぞとふしぎ』, 小学館, 1983年などが挙げられる。